

一般社団法人はなそう基金 2018年度12月末決算

2019年2月20日

一般社団法人はなそう基金

代表理事 古森 剛

内容



1. 2018年度決算について

2. 今後の方向性について

2018年度 決算について(概況)

「一般社団法人はなそう基金」を応援して下さっている会員及びパートナーの皆さま、いつもありがとうございます。

当基金は、2019年3月6日に設立満7年を迎えることとなります。設立の背景となった東日本大震災の発災からは約8年が経過。この間、ほぼ毎月1回以上「Komo's英語音読会」その他の活動で現地に通う中で、東北被災地の様子も毎月のように様変わりしているのを実感しております。復興の進み具合は、地域により産業・業種により個人により千差万別であり、さらに人間の生きがいやコミュニティの安心感、未来へ向けた人的投資などのソフト面にまで着目すれば、影も日向も入り混じった景色となっております。各種社会インフラの回復や新設が進展する中で、本質的かつ持続的な復興と、その先にある創造への希望は、まだら模様です。マクロで考えると悲観的な観測が優勢となりますが、一方でミクロの視点では様々な個人や団体、企業、公的セクターの人々などによる献身的、意欲的な取り組みが続いています。当基金の活動も、微力ながらそうしたミクロの明るい要素の一つになっているものと思います。

当基金の活動に関しましては、ウェブサイトやFacebookページにて随時共有させて頂いておりますが、2018年における主要な活動は以下の通りです：

- Komo's英語音読会@三陸(毎月1回、陸前高田市で開催。金曜日夜、土曜日終日、日曜日午前中で開催)
- まるごと英語で夏祭り in 陸前高田(SCOAという団体との協働で8月に開催する英語環境でのスポーツイベント)
- 三鉄貸切りカラオケ列車(12月に三陸鉄道を貸切りで開催する懇親イベント。三陸と東京の双方から参加)
- チャリティー“ほろ酔い”英語音読会(東京にて月例開催のビジネスパーソン向け英語勉強会。寄付を募ります)

当基金発足以来の核である「Komo's英語音読会@三陸」は、2018年度も常時70～80名程度の登録者があり、毎月30～40名前後の参加者がありました。全市民を巻き込むような活動ではありませんが、英語学習への意欲・意志がある方々に年齢層を問わずご活用いただいております。この活動を契機にして人生が明るくなった、将来への展望が開けたなどのお声を、過年度よりこれまで多数頂いております。

また、これを支えるボランティア講師の輪は2018年度も少しずつ広がり、震災からこれだけの年数を経てもなお、東北現地の皆さまと訪問者との間に温かいご縁が生まれ、育まれています。当基金の活動をきっかけにして、東北現地にも、訪問する側にも、また東京でチャリティープログラムに参加する方々にも、様々な前向きな動きがあり、充実感、安心感、やりがい、未来への希望などを抱かれた方々がたくさんおられます。

そうしたすべての「良いこと」に心より感謝しつつ、2018年度の決算概要についてご報告いたします。

2018年度 決算について(収入面)

2018年度の決算は、収入が約252万円、支出が約372万円で、課税等も含めると約127万円の赤字となりました。

収入の多くが個人及び法人・団体の皆さまからの寄付金です。思いを込めて一度だけのご寄付という方、一括で多くの金額をご寄付頂く方、長年にわたり継続的にご寄付を頂いている方など、様々な形態があります。ご寄付のスタイルや金額の多寡を問わず、すべてのご寄付に込められたお心を有難く感じております。

2018年度において、寄付金全体への比率が大きかった法人・団体(有志の集まりも含む)からのご寄付は以下の通りです:

- ・「RUN for はなそう基金」(任意の当基金支援型ランナー団体)からのご寄付: 約50万円
- ・「チャリティー“ほろ酔い” 英語音読会」の参加者からの寄付、および合宿からのご寄付: 約44万円
- ・MERCER Japan/MARSH Japan様における企業クローズド形式のチャリティー英語音読会: 約18万円
- ・スペイン・バルセロナの日本文化スクール、bonsaikebanaの皆さまからのご寄付: €660(約8.6万円)

(なお、個人からのご寄付の金額に関しましては、お名前の公表や寄付実額等にデリケートな要素もありますため、当基金の公的な媒体における公表は行わない方針です)

当基金は、公的機関や他の非営利団体からの補助金等を受けておらず、純粹に個々人や法人・団体の皆さまの東北被災地を思う心、「役に立てたらいいな」という思いと行動が集まって、ここまでの活動が続いております。それにより、過度の公平性や公的視点に縛られることなく意思決定が行われ、一方で立場や視点としては寄付者側の利害に縛られることなくニュートラルに運営することが可能となっております。これまでのすべてのご支援と、その背景にある皆さまの思いやお心に、当基金を代表して感謝の意をお伝え致したいと存じます。

2018年度 決算について(支出面)

費用面では、2016年度に始めた「まるごと英語で夏祭り in 陸前高田」に関わる費用(約174万円)が引き続き最大のアイテムとなりました。3回目となった2018年度は、前年同様に100名規模の参加者がある大型イベントとなり、陸前高田市でも公的に認知される活動の一つとなって参りました。運営費は前年よりも削減されましたが、当基金として引き続き最大の寄付金投入先となっております。会場となった二又復興交流センター(陸前高田市矢作町)の場内交通整理や駐車場管理は前年同様に地元警備会社に委託。また、安全衛生面での配慮もあり、バーベキュー・イベントの運営も当年度から地元近隣の事業者へ委託するなど、必要な外注費用は支出するという方針で運営いたしました。しかしながら、当イベントが全体の収益の圧迫要因になっていることは大きな課題であり、2019年度以降の対応については当基金全体の方向性とあわせて、当書面後段にてご説明いたします。

その他の主要費目としましては、「Komo's英語音読会@三陸」実施に関わる毎月のボランティア講師チーム用のレンタカー代(約99万円)、ガソリン代(約26万円)、高速代(約24万円)、陸前高田における地元交流・懇親会等(約21万円)などがあります。なお、英語音読会の会場は、会の発足以来陸前高田市の大坂芙美子様宅を無償で使わせていただいております。また、一部日程で陸前高田グローバルキャンパスを活用しておりますが、公的施設のため年間計で1万円強に抑えられております。他に、英語音読会参加者向けの不定期の印刷物制作と送付、ウェブサイトのメンテナンス、三陸鉄道イベント、クレジットカード寄付関わる諸手続き及び手数料、租税公課 等があります。印刷物関係では、前年に引き続き、2018年の一年間に「Komo's英語音読会@三陸」に参加したボランティア講師全員を対象に陸前高田側の英語音読会参加者向けのメッセージを募集し、集まった多くのメッセージを小冊子形式にして年末に送付しました。

なお、経費は必ずしも一方的に支出になるものばかりではありません。陸前高田を往復する基金代表車のガソリン代や高速道路代は、同乗したボランティア講師から別途定額の寄付を頂くことで間接的・部分的に相殺されております。また、現地懇親会等の費用も、適宜参加費を頂くことで部分的に回収しているものもあります。

斯様な状況でございますが、過年度より一貫して、東北被災地の現実の人間社会に向き合いつつ「顔が見える関係性」を大切に、活動の充実へと取り組んで参りました。皆さまのこれまでのご支援に、心より感謝申し上げます。

2019年2月
一般社団法人はなそう基金
代表理事 古森 剛

2018年度 貸借対照表

2018年12月31日 (単位:円)

資産の部		負債の部	
【流動資産】	3,524,264	【流動負債】	740,055
現金及び預金	3,518,755	未払金	740,055
商品	5,509	【固定負債】	1,019,620
		長期借入金	1,019,620
		負債の部合計	1,759,675
		純資産の部	
		【株主資本】	1,764,589
		利益剰余金	1,764,589
		その他利益剰余金	1,764,589
		繰越利益剰余金	1,764,589
		純資産の部合計	1,764,589
資産の部合計	3,524,264	負債及び純資産合計	3,524,264

一般社団法人はなそう基金の運営は、その活動の性質上特に大きな資産や負債を保有するものではありません。基本的には、流動資産(現金及び預金)が資産の大半を占め、「商品」として計上されているものは過去に制作サポートをさせて頂いた書籍・冊子等の予備的な在庫分です。

負債の大半は、創業時に設立時社員(代表理事 古森 剛)が無担保・無期限で融資したもので、その他は会計処理タイミングにより生じる未払金等となります。2018年度に関しましては、決算時の未払金は個人が立て替えている経費に関する未清算分となります。

一方、流動資産に対する負債の比率が約50%に達し、その負債の4割強が未精算経費という状況は、法人の持続的運営の観点からは問題でもあります。今後の運営においては、財務的健全性の向上が求められる状況と認識致しております。

2018年度 損益計算書

2018年1月1日～12月31日 (単位:円)

【売上高】		
売上高	512	
売上高合計		512
【売上原価】		
期首商品棚卸高	5,509	
合計	5,509	
期末商品棚卸高	5,509	
商品売上原価		0
売上総利益金額		512
【販売費及び一般管理費】		
販売費及び一般管理費合計		3,699,588
営業損失金額		3,699,076
【営業外収益】		
受取利息	162	
雑収入	2,517,779	
営業外収益合計		2,517,941
【営業外費用】		
為替差損	17,663	
営業外費用合計		17,663
経常損失金額		1,198,798
税引前当期純損失金額		1,198,798
法人税等		73,114
当期純損失金額		1,271,912

一般社団法人はなそう基金の運営においては、「売上高」「売上原価」「売上総利益」のカテゴリに含まれるものは書籍・冊子等の販売に関わるものです。税法的には、この部分が営利事業に関わる売上関連項目となります。これらに紐づく販売費・一般管理費を差し引いたものに関して、税法に基づき応分の税金を納めることとなります(非課税事業がマイナス収支でも、別個に課税)。ただし今期は営利事業の利益が1,000円未満であり、実質的にはその部分に関する法人税の課税は発生しませんでした。

当基金における最大の収入項目は寄付を主体とする雑収入であり、こちらは非営利事業に関わるものとして非課税の扱いとなります(一般社団法人のため、寄付者側では非課税支出にはなりません)。今期は、「まるごと英語で夏祭り in 陸前高田」という比較的大きな費用を要するイベントの運営を継続しつつ、そのために別途追加でのファンディングは行わなかったため、収入の金額を支出が大きく上回り、当期損益は127万円の純損失となりました。損益計算上でマイナスでもキャッシュとしては負担可能との見通しに基づき、あえて追加ファンディングは行わずに運営しました。

2018年度 販売費及び一般管理費内訳

2018年1月1日～12月31日（単位:円）

旅費交通費	1,333,848
通信費	6,382
事務用消耗品費	1,994
支払手数料	14,003
車両費	263,369
租税公課	22
支払報酬料	51,461
雑費	2,028,509
販売費及び一般管理費合計	3,699,588

当基金の当期における販売費及び一般管理費における最大の用途は、2016年度に始めた取り組みである「まるごと英語で夏祭り in 陸前高田」に関わる費用（約170万円）です。3回目となった2018年度は、前年に引き続き100名規模の参加者がある大型イベントとなり、陸前高田市でも公的に認知される活動の一つとなって参りました。各種運営費は前年よりも若干削減されましたが、当基金としては引き続き最大の寄付金投入先となっております。会場となった二又復興交流センター（陸前高田市矢作町）の場内交通整理や駐車場管理は前年同様に地元警備会社に委託しました。また、安全衛生面での配慮もあり、バーベキュー・イベントの運営も当年度から地元近隣の事業者へ委託するなど、必要な外注費用は支出していくという方針で運営いたしました。しかしながら、当イベントが全体の収益の圧迫要因になっていることは財務的には課題であり、今後の方向性に関しては経営としての慎重な判断が必要と認識しております。

その他の主要項目としましては、「Komo's英語音読会@三陸」実施に関わる毎月のボランティア講師チーム用のレンタカー代（約99万円）、ガソリン代（約26万円）、高速代（約24万円）、陸前高田における地元交流・懇親会等（約21万円）などがあります。なお、英語音読会の会場は、会の発足以来陸前高田市の大坂芙美子様宅を無償で使わせていただいております。また、一部日程で陸前高田グローバルキャンパスを活用しておりますが、公的施設のため年間計で1万円強に抑えられております。

内容

1. 2018年度決算について



2. 今後の方向性について

今後の方向性について

大幅に赤字となった2018年度決算を振り返り、関係各位の現状認識や忌憚のないご意見もうかがう中で、今般重要な意思決定をいたしました。2019年度の年央を持ちまして、「一般社団法人はなそう基金」は、法人としては解散いたします。その後は、東北被災地の中期的復興・繁栄を願う人々が集い、様々なリーダーがイニシアティブを自由に発案し、それに呼応する有志が活動や資金提供をともにする柔らかな基盤「はなそうコミュニティ」(仮称)へと発展的に移行いたします。

2018年度の大赤字決算は、「まるごと英語で夏祭り in 陸前高田」の運営費をこれ以上削ることが難しい中で、収入側で特段の追加ファンディングを行わなかったことが主因となっております。これ自体は今後ファンディングを工夫・強化することにより様々な対応の可能性があると考えますが、この件が発端となって当基金内で意義深い様々な意見交換が行われ、結果として、これまで隠れていた以下のような文脈や課題が表面化しました。

- 設立後8年近くを経る中で当基金への寄付金の出し手が多様化し、かつ、大規模なサポーターグループ等も複数存在、拡大する中で、寄付金の使途に対する期待値や意向も多様化が進んでいる
- そうした中、「まるごと英語で夏祭り in 陸前高田」の実施に関しては水面下で疑問も多かった模様。2019年度の継続実施に関しては、代表理事(古森)の意思決定に対して初めて明示的な反意が表明された
- これは氷山の一角であり、本質的には寄付金の出し手である各ステイクホルダーと、寄付金を活動に変換する当基金経営者との間でのギャップの顕在化が進行していると見るべき
- 関わる人々が増えるにつれコンセンサス形成の複雑度が上がるのは組織の常ではあるものの、背景には、寄付の出し手が得られる「手触り感」と活動の現場で見ている「現地での価値創出感」のギャップもあると認識

こうした文脈や課題に接して、通常の企業経営としてはビジョンや価値観の再定義・共有、組織内コミュニケーションの濃密化、経営の意思決定に関する方針の明確化とガバナンスの強化...などの策が講じられることでしょう。一方、当基金は誰一人として報酬をもらわない完全ボランティア集団であり、フルタイムの職員も一人として存在しません。良い意味で、経営者を含む全構成員が「片手間で」社会貢献をしている集まりです。組織規模や財務的規模から見て、いわゆる大企業のようなフォーマルな経営施策で応えるのは適切ではないと考えます。自由でフレキシブルで、「思い」を大事にして迅速に行動する要素を維持しつつ、東北被災地への活動に対し、関係者の活動時間、エネルギーを最大投入するにはどうしたら良いか... ということ、今回深く考えるに至りました。

今後の方向性について

こうした考えのもと理事間で検討を行い、代表理事から打ち出された以下のような方向性が決まりました。

- ① 一般社団法人はなそう基金は、2019年度の「まるごと英語で夏祭り in 陸前高田」の実施後、各種経費精算などが完了する9月末を目途に解散する。解散後の集団の移行先は、「はなそうコミュニティ」(仮称)とする。初期的には、現在Facebook上にある「はなそう基金 会員&パートナー」のグループがそのまま名称変更して移行し、その後は随時メンバーは離合集散する。当初のFacebookコミュニティ管理人は、現行管理人(古森)が務める。
- ② 現在の寄付金のように一般から広く募り、基金の経営判断で特定の活動に振り向けるプロセスは役目を終える。東北被災地向けに行いたい活動を想起した人が「この指とまれ」方式で呼びかけ、活動参加者や資金協力者を募る。イニシアティブごとに人とお金が集まって動いていく。「はなそうコミュニティ」(仮称)の基盤が存在することにより、そうした呼びかけに呼応する人々の有機的な連携や反応が進みやすくなる。かつ、極めて自律的であり、活動の現場と資金の出し手の間の認識・実感値のギャップが生まれにくくなる。活動者＝資金協力者という場面も増える。
- ③ 各イニシアティブにおいては、資金の収集・管理が発生する場合、それぞれに収集方法や資金管理の方法等を定め、関係者間でその方法について合意し、関係者内で自律的に運営をしていくこととする。「はなそうコミュニティ」(仮称)としての統一の金融機関口座は設けない。現行の基金口座は法人清算と同時に全て閉鎖する。
- ④ そうしたイニシアティブの一つとして、2019年10月以降も、現行の「Komo's英語音読会@三陸」や「チャリティー “ほろ酔い” 英語音読会」(東京)は、「はなそうコミュニティ」(仮称)内の有志の活動として維持する。上記2件は発足当初より連動関係にあり、東京の英語勉強会で集めた寄付(今後は法的には寄付とは呼称しない)を東北向けの活動に生かすモデルケースとして位置づけられる。

上記のように、「はなそう基金」は「法人」としては清算されますが、そもそもの目的である東北被災地の長期的復興に向けて貢献し続けるという軸は、むしろ柔軟性や自律性を増した形で再定義されます。これまで以上に、考えるだけでなく実際に行動をする、お金を出すだけでなく口も出すし行動もする、という集団になるべく前進します。法人形態や組織形態は、目的を追い続けるための「vehicle」に過ぎません。東北被災地への思いのある方は、是非、今後とも「はなそうコミュニティ」(仮称)の輪の中で、前に進んでまいりましょう。よろしく願い申し上げます。末長く、ご一緒に！

代表理事 古森 剛
理事 山崎 暢子、奥田 裕子